実践報告
来館者の持っている力を引き出す②
―コレクション展Ⅲ『屏風 Traveling －展示室で旅気分－』―

鈴木　有紀

1　はじめに

世界中が新型コロナウイルス対策に奔走することとなった2020年春、愛媛県美術館でもそれまで「普通」に行われていた美術館活動の殆どを見直さざるを得ない状態になった。そして2021年2月現在、今も完全に元通りでないのが、展示室内や県民アトリエ等で、鑑賞者と美術館が物理的にも心理的にも距離を縮めていく博物館教育の活動である[1]。特にこの15年間、当館で継続的に実施してきた「展示室内での対話型鑑賞」は再開の目途が立っていない[2]。コロナ禍はまた、予定していた展覧会の中止や延期、日程や内容の変更等、年間の展示計画にも大きな影響を及ぼした。ここではそのような中、実際には鑑賞者と対話できない展示室で実施した小さな対話の試み―コレクション展Ⅲ『屏風Traveling』についてその概要を報告する。

2　実施までの経緯

実はコレクション展Ⅲ『屏風Traveling』は年度当初、計画されていなかった。本展は新型コロナウイルス対策により中止・延期となった企画展の代わりに実施することになったコレクション展である。『屏風Traveling』はまた予算の制約上、受付以外は監視スタッフを常駐させることが出来なかったため、全ての作品をウォールケース内に展示せざるを得ず、鑑賞者と作品の間に「距離」が生まれるという環境下で計画をスタートした。しかし、展示計画を練るにあたり、一つの展覧会事例が頭にあった。

> これまでのやり方や経験に縛られないで、来場者のもっている能力を引き出せるような、別のやり方を探ってみるのは充分に意味がある。また実際に世界各地の美術館で、今もこうした試みに意欲的にとりくんでいる人々がいる。たとえば2001年バルセロナで開かれる現代美術の大規模な展覧会では、展示品の約半分に、1つではなく7つのラベルが添えられることになった。ラベルは作品の脇に映写機を使って投影され、来場者はこれを読めば、ただ学芸員の言葉だけではなく、10歳の子ども、若手研究者、お年寄り、家事手伝い、作家、そして美術館の警備員の考えも知ることができる。

これは、日本に対話型鑑賞を紹介した国外の専門家の一人、元ニューヨーク近代美術館のエデュケーターで美術史家のアメリア・アレナスが紹介した、2001年バルセロナのラ・カイシャ財団で開催された現代美術の展覧会[3]の様子である。

実は当館ではこのバルセロナの活動を参考・応用したコレクション展をこれまでにも実験・実施してきた[4]。しかしコロナ禍により、少なからず「これまで通り」が通用しなくなった。そのため、今回は前述のバルセロナの例に学び、ウォールケース内に展示した11の作品全てに、1つではなく5つのラベルを添え、鑑賞者がこれを読めば「学芸員（当館以外の学芸員にも協力してもらった）の言葉だけではなく、10歳の子ども、80歳高齢者、作家（当該作品の作家ではなく現在作家活動を行っている洋画家・版画家・染織家ら）、美術館警備員」の考えを知ることができるようにし、何度も作品そのものを「みる」ことを繰り返しながら、更にそこに作品をみた鑑賞者自身の考えも加わることで、あたかも鑑賞者と「5人」が作品をめぐって対話を行い、鑑賞が深まるような「場」を準備した。コレクション展Ⅲ『屏風Traveling』の概要は次のとおりである。

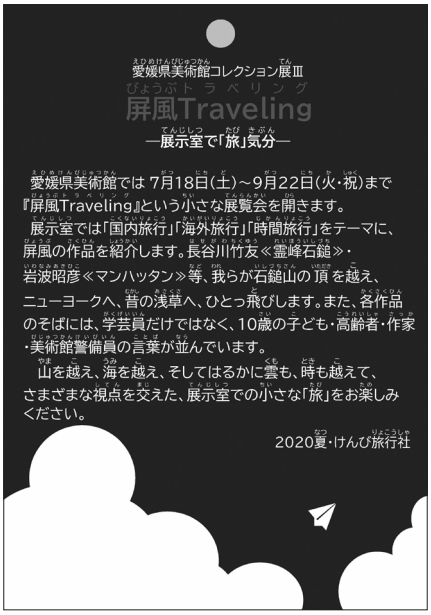
3　コレクション展Ⅲ『屏風Traveling』

（1）会期・場所等

会期：2020年7月18日（土）～9月22日（祝日）
場所：本館2館常設展示室1
期間来場者数：2,791人

（２）展示構成

「国内旅行」「海外旅行」「時間旅行」をテーマに屏風と軸11点で次のとおり構成した。



資料１挨拶パネル

まず「旅」のプロローグとして、瑞雲に乗って飛ぶ「十六羅漢」の姿を描いた、遠藤広実の《十六羅漢図》江戸時代後期・絹本著色・軸・91.7×43.0cmを配置するところから展示をスタートした。

①　第一章『屏風で「旅」しよう』

「旅」のはじまりとして次の三つの作品―長谷川竹友の《霊峰　石鎚》制作年不詳・紙本着色・六曲屏風一隻・174.5×373.0cm、岩波昭彦《マンハッタン》・平成３年（2003）・紙本着色・四曲屏風一隻・152.0×304.0cm、木和村創繭郎《浅草寺》・昭和11年（1936）・紙本着色・二曲屏風一隻・175.5×181.0cmを国内旅行・海外旅行・時空旅行の位置づけで展示した。

②　第二章『屏風は３Ｄ』

次に屏風に目が慣れて来たところで、屏風の大きな特徴である、入り尾瀬と出尾瀬を巧みに使って表現した二つの作品―野田青石の《瀞八丁図》・昭和元年（1926）・　紙本着色八曲屏風一双・109.0×351.0cm、高倉観涯《唐人図屏風》制作年不詳・紙本金地着色・六曲屏風一双・寄託作品、を使って、屏風の面白さに触れてもらえるような内容にした。また今回、《唐人図屏風》に描かれた「煮茶図」と画題を同じくする沖冠岳の《花前煮茶図》・明治四年（1871）・紙本着色・軸・寄託作品も併せて展示し、「旅」の合間に「ちょっと一服」として、煎茶の歴史に思いを馳せてもらえるようなコーナーを作った。

③　第三章『此方より・彼方より』

更に、第三章では日本は四方を海に囲まれていることから、舟に乗って旅をする人々の姿を描いた、英一蝶の《乗合船川渡之図》・制作年不詳・絹本著色・軸・寄託作品や、遠く海の彼方をイメージさせる伝狩野探幽《桐鳳凰図屏風》・制作年不詳・紙本金地着色・六曲屏風一双・寄託作品や逆に海の向こうから、やって来る者をイメージさせる、松本山月《七福神図》・江戸時代中期・紙本墨画淡彩・軸・寄託作品を展示し、最後にエピローグとして、遠藤広古《猿田彦神図》・江戸時代後期・紙本着色・軸・寄託作品を展示し、展示室を出た後の、鑑賞者の旅の安全を願う構成とした。

（４）５つのラベルについて

次に作品のそばに添えた５つのラベルについて、どのようなものだったのか、その中の一つを紹介する。なお実際のラベルの漢字には全てルビをふった。

写真１　野田青石《瀞八丁図》・昭和元年（1926）・紙本着色八曲屏風一双・109.0×351.0cm

①　学芸員のまなざし

ど――――――ん！と断崖が迫ってくる！出オゼ（屏風の出っ張っているところ）の部分に巨石や岩が描かれ、景色に遠近感が生まれています。モティーフの描き込みが少なく、彩色もあまり施されていないことが、逆にいろいろな想像を膨らませます。きっと、深緑色の川でおいしい魚が釣れるはず！断崖上部での生活など、妄想にふけってしまいました。船に乗って洞窟探検したいなぁ・・・。

②　10歳のまなざし

人が渡ってる。舟に乗ってる。マンガみたい→理由は全部白黒だし、丁寧に描かれているし。絵をさ

かさまにしても、みられそう。

③　80歳の高齢者のまなざし

二曲の屏風の絵の繋がり具合からすると筏の方が左で、釣舟の方が右にある方がしっくりくるような気がする。理由は石置き屋根の家並みの配置から。絵の上下に多くの余白を残し中央部の断崖絶壁とそこの植生（松か？）もデフォルメされ省略され、水墨画の特色が活かされて素晴らしい。釣舟と筏で水面を表しているが、流れが感じられず静寂そのもの。この屏風の前ではよく眠れそう。

④　作家（版画家）のまなざし

立ち上がる岩に木々が枝を伸ばし広い水面に人々が浮かぶ。過不足なく絵筆が走るのは風景の境界。墨を乗せることで描かれた白。何もないはずの余白に断崖と水の流れをみる。

⑤　美術館警備員のまなざし

筏流しや舟が描かれているが、川の流れが感じられない。静かな作品です。

なお、③の高齢者の言葉の中にある「二曲の屏風の絵の繋がり具合からすると筏の方が左で、釣舟の方が右にある方がしっくりくるような気がする」という視点を受けて、日本美術担当の学芸員と相談し、会期後半には右隻と左隻を入替えて鑑賞してみる、といった展示替えを行った。以下はその告知文である。

> 本作品《瀞八丁図（どろはっちょうず）》のスタンダートな配置は展示のとおりです。ですが、この作品は右左を入れ替えて、違った景色を楽しむことも想定していると思われます。8月26日から右隻と左隻を入替える予定です。お楽しみに！

またこの『屏風Traveling』では「旅気分」の小さな演出として、受付で「どこまでもいける飛行機チケット」と称した栞を鑑賞者に配布した。さらに、展示出口付近には、コロナ禍が過ぎ去った後には、実際の場所に旅に出て楽しんでほしいという想いから展示作品に登場した、石鎚山（愛媛）・浅草寺（東京）・瀞峡（和歌山）・猿田彦神社（三重）の観光パンフレット等の資料を配架した。

4　鑑賞者からの「声」と今後の課題

最後に会期途中から再開したアンケートから垣間見えた鑑賞者の「声」をみて、今後の課題を考えたい。

（1）　作品に関する「声」

①　長谷川竹友《霊峰　石鎚》

・山伏の表情や行動から色々な想像がふくらむ。

・石鎚山の屏風素晴らしかったです。

②　岩波昭彦《マンハッタン》

・夜に輝く都市の光が再現されていて印象的

・屏風に現代のNYの夜景を描いていたのは意外でしたが…とても幻想的で今はコロナの影響でなかなか海外渡航できないだけに惹かれました。

・向い岸の光が魂のようだというのに共感できた。

・ずっと好きな作品で今回じっくり見られて更に好きになりました。奥行きのある情感たっぷりの夜景に、外出・旅行のままならない今を慰められました。

・マンハッタンの夜景が細かいところまで描かれており、迫力を感じました。

・現代の絵で屏風になっているものが珍しいと思いました。また色の青と黒のバランスと深さが良かった。

③　木和村創繭郎《浅草寺》

・赤い寺が素敵でした。すいかを売っていたのが面白かった。

④　松本山月《七福神図》

・暗い作品だったが、内容はとてもめでたいものばかりで興味深い絵だった。龍が出たり、鯛が釣りをしていたり。

・釣られる対象の鯛が釣りをしていたので。

・めでたさの詰め合わせのような感じで気に入りました。ポストカード等あればこれを買うかなと思います。

⑤　伝狩野探幽《桐鳳凰図屏風》

・確かな画力ですばらしいと思った。

⑥　遠藤広古《猿田彦神図》

・猿田彦之命の眼光、印象的

（2）『屏風Traveling』に関する「声」

①　展示環境について

・《マンハッタン》を座ってずっと眺められて本当に楽しめました。ベンチ、畳に座布団、どれも楽しく座れて良い空間だったと思います。

・光の具合など落ち着いて、じっくり鑑賞できました。
・畳の上で子どもと一緒にゆっくりみられました。
・畳が敷いてあったのが、作品をより楽しめるような工夫で面白かったです。
・屏風絵はゆったりと心が開かれますね。
・屏風を畳に座って見るのは面白かったが離れて立って見たい人にとっては不便かと思いました。

② 屏風の見方について
・屏風の見方を初めて知りました。右→左・左→右・そして畳に座らせてもらって正面から見ました。名ガイドありがとうございます。
様々な所へ旅に行けました。

③ ５つのラベルについて
・今回「旅」気分の展示は工夫されていて面白かった。いろいろな人の感想もあって、ついつい読んでしまった。少し見えにくかったので、位置や背景をもっと白にして見やすくするなど、さらに工夫をされると良い。屏風も良いなあと感じた。ありがとうございました。
・特殊と言えば特殊な状況ですが、自分一人と作品たちとの空間を楽しめました。ただ作品毎のコメントにはしっかり鑑賞のガイド役になってもらいました。
・ありがとうございました。80歳の方のコメントが面白かったです。
・展示室でちょっとした「旅気分」を味わえて、楽しかったです。お子さん、高齢の方、学芸員さんなど５人５様、それぞれの見方、感じ方があって興味深くて面白かったです。私も同じように感じたり、全く違ってたりと５人の方と対話するように拝見させていただきました。
・子どもや80代等、いろんな立場からの視点・感想が面白かったです。
・様々な人の言葉が展示品と一緒に展示されていて、年齢、職業、知識による感じ方の違いが面白かった。
・10才や80才などいろいろな人の考え方が書いてあり、ふつうにみるより、楽しくみれた。
また来たいです。
・キャプションの字が大きく少なく簡潔だとより良いと思います。

④ 今回の企画について
・どの作品も「旅気分」を盛り上げてくれました。
・本当に旅に出かけたようで楽しめた。
・いい名所でした。また参りたいです。

まず、コロナ禍にも関わらず、期間中約3,000人の鑑賞者が訪れてくれたことに心からの感謝を述べたい。

次に作品に関する「声」では印象に残った作品として、特に岩波昭彦の《マンハッタン》が挙げられており、またラベル（他者の視点）をみての発言もみられる。しかしこのアンケートは厳密に『屏風Traveling』のふりかえり用に作成したものではなく、広くコレクション室運営改善のために採っているものである。ただ今回のように直接鑑賞者の学びの様子を聞き取ることが難しい場合でも、アンケートという形を取ることで、鑑賞者の学びの様子を少しでも考察できる可能性に気付いた。展覧会の評価にあたり、今後に活かしたい。

更に５つのラベルについては、おおむね良好であり、

私も同じように感じたり、全く違ってたりと５人の方と対話するように拝見させていただきました。

といったようにフラットに他者の視点を取り入れながら、自分の視点も交えて、そこから作品鑑賞を深めようとする姿が垣間見える。今後は各ラベルの文章量や、大きさに配慮するとともに、意図的にとはいかないまでももっと鑑賞者に深い鑑賞体験を提供するための、ラベル内容の在り方について探っていきたい。

最後に受付スタッフが度々知らせてくれた、鑑賞者からよく聴かれた「声」として、『一人で来たが、ラベルの５人と話しながら鑑賞出来て、寂しくなかった。楽しい「旅」だった』というものと『小さな展覧会で、作品も11点と少なかったが、かえってじっくりと落ち着いて見られた』というものがあった。このことについて、鑑賞者にみる＝考えるための、「場」を提供できたことを嬉しく思う。と、同時に展示する作品の点数について今回考えさせられた。計画当初、たった11点では鑑賞者はもの足りないのではないか、と一方的に思っていたためである。企画者としては、鑑賞者にみてもらいたい作品はたくさんあり、ついつい多くを展示してしまいがちになる。

今年度は新型コロナウイルス対策のため、様々な美術館活動を改めて考え直すということを行った一年になった。しかし、たとえコロナ禍であってもなくても、鑑賞者自身がじっくりと考えられ、自分のペースで学

びを進めていける場を創っていくためにも、今後もベストを尽くしていきたい。

註

（1）展示室内での学芸員による解説、作品ガイドボランティアによる対話型鑑賞は鑑賞者と距離を近くするため、現在は休止している。同じく館内でのワークショップ活動も、人数制限を行い、参加者どうしで制作可能な内容の活動実施している。

（2）2021年2月現在は美術館講堂を使って、鑑賞者どうしの距離を確保しながらスライドでの対話型鑑賞を実施している。

（3）アメリア・アレナス著　木下哲夫訳『みる・かんがえる・はなす・きく鑑賞教育へのヒント』(2001、淡交社） p 167

（4）拙稿「実践報告　来館者の持っている力を引き出す①―コレクション展「なぞなぞ美術館」の試み―」『愛媛県美術館研究紀要』第18号（2018、愛媛県美術館）pp. 121-132

謝辞

展覧会の開催にあたり、５つのラベル作成に協力いただいた、斎藤華氏、鈴木洋氏、版画家のむらこしなおこ氏、近藤英樹氏、土居明生氏、染織家の野本久美氏、洋画家の渡辺利彦氏、越智辰雄氏、俳人のキム・チャンヒ氏、デザイナーの山野薫氏、京都国立近代美術館主任研究員の梶岡秀一氏、愛媛県教育委員会文化財保護課学芸員の松井壽氏、愛媛県スポーツ・文化部まなび推進課学芸員の喜安嶺氏、久万高原町町立久万美術館学芸員の中島小巻氏、愛媛県美術館学芸課の土居聡朋氏、石﨑三佳子氏、長井健氏、高木学氏、五味俊晶氏、愛媛県美術館警備員の荒木隆博氏、そして、「旅先」のパンフレット等資料を提供いただいた、西条市観光振興課、十津川観光協会、熊野御坊南海バス（株）、猿田彦神社　本社、そして金龍山浅草寺のみなさまに対し、この場を借りまして御礼申し上げます。